

# 新聞の中のシベリア出兵

井 竿 富 雄  
Tomio IZAO

はじめに

- 一 戦況通信
  - 二 ロシアとロシア人
  - 三 美談の構造
- 小括

## はじめに

戦争では前線と銃後の問題が出て来る。全員が軍人として出征するのではなく、或るものは出征し、またあるものは後方で軍需品生産などに従事するという分担がある以上、どうしてもこのような問題は起こる。特に対外戦争の場合、戦線は遠くにある。そのため、戦争の戦いぶりなどは、何らかのメディアを通じてしか国内的には伝わらない。現在のようにインターネットなどの手段がない時代においては、情報は新聞や雑誌などのメディアにより、時間を置いて伝えられるものであった。メディアに載った記事によって自国軍の戦いぶりや将兵の健康状態などが伝達され、これが国内の読者によって読まれていくのである。

本論文は、シベリア出兵において、上記のような前線と銃後とをつ

ながメディアを通じて、シベリア出兵がどのように伝えられたかについて考察するものである。特に今回取り上げるのは、これまでも拙稿で使用してきた山口町で発行されていた新聞『防長新聞』である<sup>①</sup>。シベリア出兵は一九一〇年代後半から一九二〇年代のことであるから、まだメディアとしては雑誌・新聞などの活字メディアが主流である(映像メディアが全くないわけではない<sup>②</sup>)。このようなメディアの中に、シベリア出兵がどのように位置づけられてきたかを知ること、戦場はどのような銃後に伝達され、銃後の一般国民へと訴えかけようとしていたかの一端を知ることができるのではないかと考えられるからである。むろん、今回利用する『防長新聞』は全国紙ではない。また、全国展開されている新聞が出兵に参加している日本軍を紹介するのは異なり、専らローカルな新聞が「郷土部隊」について追いかけていくものであるから、新聞と読者との関係は一層近いものになるだろう。このようなことについての研究は、最近出てきている。従軍日記や、兵士の書いた手紙、また前線へ送られていたローカルな内容の出版物の研究が出てきている。本論文は、このような流れに触発された試みの一環である。残念ながら、ここでは新聞側の読者に向けての働きかけについてのみしか扱うことができない。読者が新聞側の努力をどのように受け取ったかは、別に考察しなければならぬ。この点につい

ては関係者の叱正を請いたいところである。

## 一 戦況通信

新聞に見られるシベリア出兵関係記事で、最も目に付くのはやはり従軍記者や軍人による戦況通信である。シベリア出兵には、従軍記者も同行した。また、出兵している区域に駐在して原稿を送ってくる場合もあったようである。<sup>④</sup>ただ、今回とりあげる『防長新聞』は、従軍記者を派遣したという事実は見当たらない。派遣軍に所属する軍人の投稿を載せている。また、正体不明の（恐らくは軍人がペンネームで書いているのではないかと考えられる）同行記事が書かれていることもあった。

陸海軍に所属する軍人は、言論の自由を持っていなかった。特に、メディアを利用して自らの所見を発表するなどの行為は、規制の対象であった。陸海軍各々が「軍人軍属著作規則」という規則を持っていた。この規則では、軍人はあらかじめ所属長官の許可を得られなければ著作を発表することはできなかったのである。山口の例ではないが、次のような例がある。第一二師団（福岡）に所属していた兵士松尾勝造は、自身が兄に送った書簡が地元新聞に掲載されていることを知り驚愕した。この規則があったからである。自身の手紙が掲載された新聞が送られてきたのを目撃した松尾は、その新聞を廃棄している。<sup>⑤</sup>

しかしながら、『防長新聞』紙上には、多数の軍人による手記・書簡などが掲載されていくことになる。ここではまず、戦況についての通信を扱っていきたい。

一九一九年八月に山口から出発した連隊は、九月にはすでにボリシエヴィキ軍との戦闘に突入した。九月中旬には、すでに戦死の報が出ている。<sup>⑦</sup>その二日後の紙面には、初めての出勤に関する「第五師団歩

兵第四十二連隊機関銃隊桂月」という署名のある記事が登場している。<sup>⑧</sup>この「桂月」なる人物は、頻繁に郷土部隊の近況や戦いの状況などを語ってくれる存在である。

この戦いについては「十数倍の敵に対抗し、約二時間の長き間、勇戦奮闘の結果、敵に多大の損害を与へて撃退せりと云ふは、其勇敢、其精銳は、以て皇威の発揚、国命の遂行に遺憾なきものとして、褒賞に値せずんばならず」と軍隊の奮戦を讃えるコラムが掲載されている。<sup>⑨</sup>これを追いかけるように、また「桂月」署名の文章が掲載される。これは軍隊の行進について述べられたものであったが、ここには「いさぎよく屍を露にさらすかな秋風寒き西比利亜の原」

という自作の短歌が添えられていた。<sup>⑩</sup>同日の紙面には石川忠治連隊長から留守部隊にあてられた書簡が公表されている。これは記者に対して軍人が読み聞かせたという形で公表されていた。<sup>⑪</sup>この書簡は、すでに「読まれる」ことが予期されたものではないか、ということが、実は以下の文面からうかがわれる。石川連隊長は、戦死者の遺族に対して「十分御慰藉の途を講ぜらるると共に機会あらば一般出征者家族を御激励被下々敷通信等を致さざる様御配意」してほしいと書いていたのである。遺族が弱気になることがあれば、今後の士気の高揚ははかり得ないであろう。この日の紙面には、まさにこの「めめしい通信」を打破するべく、以下のような記事が掲載された。戦闘で負傷を報ぜられた兵士の母親が、四二連隊に宛てて書簡を送った。少しの負傷で天皇の「高大なる皇恩」に報いることができなのは汗顔のいたりである、「幸にして負傷快癒候節は再び戦場に御立たせ下さるべく謹頼み上候」という内容であった。<sup>⑫</sup>書簡が軍隊側から意識的に公開されたのは明らかである。戦死者を出しはじめたことに対し、対社会的な精神

的バックアップをはかったと考えられる。

九月下旬、山口の連隊を含む第五師団は、バグダッドスカヤの戦いと言われる激しい戦闘を経験した。この戦いはセミョーフ軍を支援して、「過激派」の軍勢を「討伐」するのが目的であった。四二連隊だけで三八人も戦死者を出した激しい戦いであった。これ以前から、「過激派」との戦いが困難であることは了解されていた。九月末に送られてきた軍人からの書簡（山口県知事・県部長などあて）には、「過激派は戦不利なる時は此森林地帯に遁げ込み其跡を暗す上に一度手より武器を捨てれば良民と何等異なりたる所なく其識別頗る困難にて我軍の不意に乗じては直ちに武器を採りて急襲する土匪的の行動をする者」であるから、日本軍にとっては大変困難な相手であることを認めている。この戦闘では、将校三人、准士官、下士卒四六人という戦死者を出していた。

バグダッドスカヤの戦いに関する情報は、一〇月にかけて紙面を飾り、これにあわせて社説などが書かれていった。『防長新聞』は一〇月一〇日に社説を掲げ、「我同胞亦常に派遣軍の苦難と危険と辛労とを忘れず、之れを慰問し、之れを後援するに於て、慰労なからんことを、此機会に於て、重ねて、注意し、警告せざるを得ざる也」という強い調子で読者に派遣軍への支援を呼びかけた。同日には鈴木莊六第五師団長から山口県知事宛に送られた慰問の電報が紹介されている。ここでは「此戦闘に於て貴県出身の精銳が一身を犠牲に勇戦奮闘能く任務を果したる事を報告する」とともに、遺族へのケアを求めるものであった。また、細野辰雄二旅団長から防長新聞社主筆に宛てた書簡が公表された。ここでは「彼我の機関銃は百米突以内にて射撃し戦闘の初期より手擲弾の爆裂を見一発の射撃もなく足許よりウラーの声を聞く有様」と、日本軍とポリシェヴィキ軍が接近した戦いとなっていたことが書かれている。

翌日一〇月一日の紙面には、東岐波村（現在の宇部市）出身の戦死者が生前に出した手紙が公開された。この兵士は

「嗚呼皆様がそれほどまで故里にて後援下さるなれば私等少しも後顧の思ひは御坐ひませせん骨は折れ肉はさけても飛んでも桜や梅だに咲かぬシベリヤに血に染む赤き日本男児の花を咲かするの心でやります」

と激しい言葉を連ねていた。この記事に呼応するように、同日の紙面には山口県内各地で慰問活動が行われたことを報じた。封筒と切手（柳井）、地元の新聞（大島）、そして子供達の手になる絵や作文、小学生の募金による慰問袋（山口）が戦地へ贈られたという記事が戦死者の手紙と一緒に載ったのである。

このあとも、現地から激戦を伝える書簡は続々と紙面を飾った。四二連隊第一大隊長今田莊一少佐から、中川望山口県知事に送られた書簡では、「鉄橋十四箇は悉く破壊せられ過軍を撃破して修繕すれば亦破壊せらるる有様」、前方のポリシェヴィキ軍と交戦中に後方の橋を焼かれていたなどという困難な状況を伝えてきた。第二大隊長清水誠少佐からは、戦死者の招魂式の様子を知らせる書簡が届いた（宛先は柏村唯雄吉敷郡長）。そこには「激戦三日敵ながらも其奮闘目覚しく殊に彼我兵力の懸隔甚しくして我軍に悪戦苦闘想像に及ばざる処幸に敵を潰乱に陥れ得たりと雖も我損傷も亦尠しと言ふ可からず」と、ポリシェヴィキ軍が強力な敵であることを認める文章すら載っていたのである。この間、山口は大きな事件が発生していた。シベリア出兵を発動した元首相、寺内正毅の死去である。寺内の遺骨は特別列車を仕立てて山口へ運ばれた。一九一九年十一月一日、遺骨は宮野村の住民の迎えを受け、宮野村桜畠に葬られた。郷土出身の偉人として寺内を讀める記事の合間にも、シベリア出兵の激戦を伝える報道は載せられて

いた。戦闘での負傷者に対し、皇后から包帯が下賜された。これに對して、下士官が感激の文面を綴った。しかしそこには、「朔風に吹き荒されて創痍の疼痛はいやが上にも烈しく顔も頸筋も手も足も塵芥にまみれ鬢茫茫として見る影もなき憐れなる姿」の日本軍負傷兵が描かれていた<sup>(2)</sup>。

しかし、このように、激戦に疲れ、傷の痛みにうめく將兵だけが描かれたわけではない。新聞紙面には、現地で作られた替え歌が掲載された。新聞紙面には、時折替え歌（あるいはそれとおぼしきもの）が掲載された。替え歌は、原曲の著作権の問題があるため、ここに紹介することは容易でない。ここでは一つだけ、著作権が消滅している「ワシントン」の替え歌として作られたシベリア出兵軍人の歌を紹介したい<sup>(3)</sup>。作者は「新に入営せんとする我親愛なる若武者達に贈る」と、徴兵された若者に向けてこの歌詞を紹介していた。郷土出身派遣部隊の勇武を強調する歌は、以下のようなものだった。

天は許さじ良民の  
秩序を害する過激派を  
防長健児の血は迸り  
ここに起ちたる討伐隊  
興安風吹き荒れて  
バイカル湖畔波さわぎ  
劍戟響き軍馬嘶く  
スハ戦ひの鬨の声

勝利を告ぐる喇叭の音  
救ひの神とぞ仰がれて

ボグダツト上秋月高く  
輝く健児がその勲

熱血燃ゆる若武者よ

男児の中の真男児

桜島<sup>(4)</sup>の武夫が群に

選ばれたるぞ身の誉

君に捧げし其の命

鳳翮風何の其の

樺野河原の寒さも何か

笑ふて忍べ国のため

日本海を打ち渡り

勇んで来たれ我が友よ

シベリヤの野に花咲く春は

共に語らん故国のこと

このような、日本軍將兵の戦いぶり、その戦闘の様子が、新聞紙面には多数掲載された。そこでは、むしろ日本軍の苦戦などもある程度載せられていた。このことは、後述する戦場での美談などとあいまって、シベリア出兵に従軍する郷土部隊のもつ重要性を強調することになったのである。

ところで、このようなシベリア出兵の舞台となったのは、言うまでもなくロシアである。シベリア出兵は、公式の声明では、ロシアに對する戦争ではないとされた。だが、ロシアの様子はある姿で通信文などに表現された。次節では、新聞紙面に載った、ロシアとロシア人に

関する描写を読みながら、「新聞がみせたロシアとロシア人」について考えてみたい。

## 二 ロシアとロシア人

日本にとって、ロシアは長い間強大な敵国であった。激戦となった日露戦争から、まだこの時点（一九一九年）では一四年しか経過していない。日本社会において、まだロシアへの恐怖心・脅威感情は相当なものであったのではないかと想像される。

ロシア革命による社会主義政権の樹立、これに伴う干渉戦争や内戦は、ロシア自体を混乱状態に陥れた。山口連隊がシベリアに出動した一九一九年は、シベリア出兵が始まってから一年が経過していた。ロシア国民は革命と内戦に疲れていた。その様子を、出征将兵や現地に住む日本人は目撃し記録した。ここでは、新聞紙面から見るロシアとロシア人について考えたい。これは、その記事内容が事実かどうかということではなく、この記事を通じて、少なくとも『防長新聞』が、どのようなロシア・ロシア人イメージを読者に伝えようとしていたかが主たる問題である。

山口の部隊が出征した直後、先遣隊からの通信文が掲載された。ここでは、ハルビンで夏にもかかわらず冬服を着てはだしのロシア人女性を目撃した大尉が「亡国の民の悲惨嗚呼如斯乎」と嘆息している。別の軍人は、ロシア人の子供が「煙草キャラメル仁丹等を日本語を以てねだり」、菓子よりもたばこを喜び、「残飯を与ふれば雀躍して之を帽子に受けて」食べる様子などを目撃している。この文章の書き手は「彼の不健全なる思想を有する奴等に心ゆく許り見せまほしきものなり」と、日本国内の社会主義者への敵対的な言辞にこの光景を見た感想を結び付けている。<sup>(25)</sup>

このようにロシア国民が悲惨な状態になった理由は何か、という問題が、この次には考えられていくことになる。そこでまず出てきたことは、「ロシア人自体の民族性」という回答であった。前述した「桂月」というペンネームの軍人は、ロシアと中国の国境の町滿洲里に到着した際、まるで戦時下の緊張がなかったとして、「彼等の頭には革命もなければ「ロマノフ」家の運命もないであろう」と書いている。<sup>(26)</sup> また執筆者不明の記事では、ロシア人はインテリ以外「人生僅か五十年末は野となれ山となれと云ふ風で日々の仕事も不熱心で可なり其日其日の生活が出来さへすればよいと云ふ考で一ヶ月に五日か六日かしか働かぬ」と、怠惰な暮らし方をしていると述べている。<sup>(27)</sup> 干渉戦争や内戦による社会の崩壊状態で放心している人々に対し、「怠け者」という印象しか持たなかったのである。

このようなロシア人への印象は、反革命派にも共通した。ある軍人はセミヨノフ軍やホルヴァート軍といった日本が擁立しているロシアの反革命派軍についても辛辣な意見を書いている。すなわち、「秩序もなければ訓練もされ居らず」、「彼等（ロシアの―井竿）将校は全く無教育外国語は全然駄目正規の教育を受けしものは中佐以上にか居らず」と、反革命派の軍人の能力の低さを批判している。<sup>(28)</sup> 中には、あからさまに「吾人はセミヨノフ將軍には相当の敬意を払ひ居れるも軍隊其ものには何ん等敬意を払はざるのみか過激派軍もセミヨノフ軍も何ん等選ぶ所なし」と書いた記事まで掲載されていた。セミヨノフ軍が掠奪を働くことと、日本軍の占領した土地を奪回されたことへの不満からであった。<sup>(29)</sup> 親日的なロシア人に対してすらこのような感覚の記事が掲載されていたということは、敵対する「過激派」についてはどのような記事が出て不思議ではなかった。細野辰雄二一旅団長が送った書簡では、「過激派は夏の蠅同様にて国家的觀念全く欠如せる露国民は唯目前自己の欲望にのみ囚はれるが故に総ての地方民は何時

過激派に投ずるやも計り難く」と書かれていた。「過激派」を「夏の蠅」と称することもとかく、「国家的観念」が欠けていることが社会主義に投ずるゆえんだと書かれていることに注目したい。このような、政治思想上の問題としてロシア人をあげつらうことは、前述したような「怠惰」を想起させる言説と重なり合っていた。在郷軍人会からロシアに派遣されていた人物は、「露人は過激派にても正義派にても日英米仏何れの国にてもパンを与ふるもの君主たるなり所謂主義もなければ定見もなし」と書いた。ロシア人は、政治的立場など無関係に、食わせてくれればどちらへも行く民族として描写されていた。この記事では、ロシア人女性には「露国婦人には貞操もなければ児女に対する真情もなし日々自己の安逸なるを以て誇となしあり」とも書いていた。最初から日本人には了解不能な他者としてロシア人は描かれていた。<sup>①</sup>

そしてこれらの文章を掲載することで、新聞は読者に何を訴えようとしていたか。それは「日本のありがたさ」「日本の強さの維持」であった。日本語で食べ物やタバコをねだるロシア人難民の姿を見た軍人は、ロシア帝国の崩壊に恐怖しつつも「日本国民として生れたる我等の幸福を祝さずには居られなかつた」と記した。<sup>②</sup>ロシア・中国両軍の軍事衝突現場で遺体を目撃した前述の執筆者「桂月」は、ロシア・中国の両国民はこのように死んだ軍人の存在を知るまい、と書き、「我等日本帝国軍人の幸福を喜ばざるを得ない」と付け加えた。<sup>③</sup>

このような読者メッセージの最も体系的に出たものが、次に紹介する記事であろう。執筆者は桂緑大尉（恐らく「桂月」という執筆者はこの軍人ではないかと考えられる）。玖珂郡から贈られた高等小学校生徒の慰問状に対し送った以下のような返信が紙面を飾ったのである。

ロシア人の子供達が日本軍の残飯をあさり、将校に日本語で「アナタ仁丹下サイ」「アナタ御金下サイ」とする様子を書き記した桂大尉は「此れ葉は勿論食ひ物から着物まで、過激派の為に取られて仕方がな

いからであります、なんと可愛想ではありませんか」と言う。そして桂大尉は、「皆様は温かき家庭の下にあり父様や母様の膝下にありて、御親切なる先生方から毎日学問さして頂かれます、なんと幸福ではありませんか」と話を続ける。日本人はこのように幸福である、この「幸福」は誰のおかげか。「いふまでもない、天皇陛下のお蔭であります」（天皇陛下の「前の欠字は原文ママ）。まず、ロシア人の不幸に対して日本国民の「幸福」を対置し、これを日本国家、そして天皇への愛着へと結びつけるのである。

この手紙には日本軍占領下の満洲里駅の写真が同封されていたという（掲載されていない）。桂大尉は書いた。「皆様戦に敗けた国程惨なものはありません」。自国が戦争に負けたら、占領され、婦女子はつらい目にあうからである。「どんな事があっても戦に敗けてはなりません」。しかし、戦争に勝つためには、軍人を支える国民の力がなければならぬ。「戦争は軍人の戦争に非ずして、国民の戦争なり」といふ事を忘れてはなりません。ロシアの現状から汲み取られるべき教訓は、「戦争に負けたら惨めだ」というメッセージに他ならなかつたのである。だからこそ、日本軍兵營の写真と同封（紙面未掲載）し、ここには日章旗が立っている、「皆様奮励して南洋にも西伯利にもあれ印度にもあれ、到る所日章旗を立てませう」と桂大尉は呼びかけたのである。桂大尉の主張は明快である。すなわち、日本はありがたい国である。しかし戦争に負けたらすべては失われる。ロシアはそのよい例である。だから強力な軍隊を維持し、戦争に勝てるように努力しなければならぬ。そしてさらに世界中に国威を発揚しなければならぬ。ロシアを反面教師にした拡張主義のメッセージであった。

以上のように、新聞紙面から伝わってくるロシア・ロシア人のイメージは悲惨なものであった。かつての強大な敵国帝政ロシアの土地は、日本を含めた他国の軍隊に占領されている。人々は日本の軍人にすが

りながら生きている。ところが反面でそれはロシア人自身の「だらしなき」というようなものに求められた。また、「過激派」(前節で取り上げた替え歌の文句を使えば、「良民の秩序を害する」ものたち)がすべてを取り上げたからという記事に見られるように、社会主義や革命といったものが人々を悲惨な状態に陥れるというメッセージも含んでいた。日本軍が内戦に干渉しているということが全く意識されないようになった記事の構成であった。これがどこまで政治的なメッセージとして自覚的に個々の筆者によって発信されていたかは不明であるが、これらの記事を紙面に掲載した『防長新聞』の編集者はこのことに十分に自覚的であったと考えられる。

さて、このような戦いには、必ず戦死傷者が出ることは避け難い。特にシベリア出兵が、国民の賛否両論を招いていたことはよく知られている。このようなときに、新聞が果たしてきた役割に、「戦死傷者の賛美」があった。次節では、この問題について考えてみたい。

### 三 美談の構造

戦争では必ず、傷つき命を落とすものが出る。このことは、戦争にとつて各種の意味を持った。一つは、敵愾心を高揚させるということである。家族や同胞を殺害したものに對する報復という感情が、新しく戦場へ人々を駆り立てる。

しかし逆に、生命や身体を奪われるということへの恐怖へ人を駆り立てるといふこともありえた。特に、シベリア出兵の場合、その大義は明快ではなかった。さらに山口の部隊が出征したとき、第一次世界大戦は終わっていた。「第一次世界大戦が終わったのになぜ自分は出征しなければならぬのか」と不満を漏らす人の声があった。<sup>(38)</sup>『防長新聞』がシベリア出兵を支援する立場を取る以上、どのようなこと

をしなければならぬか。戦闘中の自国軍将兵の勇敢な戦いぶりなどを伝えなければならなかった。

戦場からの書簡内容がワンパターンなものであることは、新聞自身が暴露してしまっていた。在郷軍人会宛に来る出征兵士からの書簡には、「一死陛下の股肱の旨を貫徹仕候」「散兵線の花と散る覚悟」「防長健児の腕を西伯利の地に振ひたく」などの言葉が頻繁に用いられていたことが明らかになっている。<sup>(39)</sup>反面、たとえワンパターンであったとしても、現地からの書簡は戦争に人々を動員するメカニズムとして機能していた。軍人が自分の出身地の人々に向かって言明した以上、勇敢であれと心理的に迫られたのである。<sup>(40)</sup>

一九一九年九月、早くも紙面には戦死者に関する記事が掲載され始めた。<sup>(41)</sup>そこでは戦死者の経歴などが紹介されていた。また、このような戦死者の場合、よき軍人であるとともに、善良な人物(国民)であることが強調された。例えば、生前親孝行であった兵士、妻を亡くして子供を預けて出征しながら、上官が止めるのもきかずに「御国の為だから是非連れて行って下さい私は之迄戦地の経験もある故大丈夫です」と申し立てて戦死した馬丁のエピソードなどはよい例であろう。

また、このような追悼記事が、上官である軍人によって書かれたものである場合もあった。一月に掲載された記事にいたっては、上官(中隊長から遺族に送られた戦死の状況報告が転載されていたのである。この記事は、必ず「我等が敬愛措かざる御令息(御愛弟など、この部分は遺族との関係で変わる―井竿)○○君は」という書き出しで始まっていた。<sup>(42)</sup>遺族に送られるべき戦死の状況報告が、不特定多数の人に読まれる新聞に掲載されるというのは、戦死が単に個人的なことではないことの現われと見るべきであろう。そして重要なことは、新聞紙上に出てくる戦死者・戦傷者は、体に重篤な障害を負っても、死を目前にしても臆病な兵士ではないと記されなければならなかったこ

とである。戦鬪で片腕を切り落とされた兵士は、切断された自分の腕を見て「この腕でも御国の御役に立ったかと思ふとなんとなく喜ばしい様な気がします」と語ったと書かれた。<sup>(42)</sup>中には頭に貫通銃創を負っているのに「中隊長殿残念です」と顔面血にまみれ碧血進る袖を合し千代田城を拝み君万歳の声も幽かに遂に名譽の戦死を遂げた」と書かれた兵士の例もある。<sup>(43)</sup>時には凄絶な光景すら描かれた。ある兵士は、戦鬪中に下顎を銃弾で碎かれた。当然口はきけない。しかしこの兵士は「時に身を動かして語るが如く目を開き振ふ手を挙げて打ち碎かれたる諸齒を抜き取りて人の拒むも聞き入れず訴ふるが如く皆に示しつつ身を震はしつつ敵愾の情更に旺盛なり」と、血まみれの顔で敵への抗戦を呼びかけたと書かれたのである。<sup>(44)</sup>現実には当該兵士が何かを語ったかは不明である。しかし記事の上ではそう語ったことになったのである。そしてこれらの兵士はすべて実名人りで報じられた。

このような戦死者に対しては、故郷で葬儀が行われた。新聞紙上では「戦死者村葬」という小さな記事が頻繁に見られる。そしてそのときには、弔問に来た軍人が戦鬪の状況を語って聞かせることもあったようである。阿武郡の例として、戦死者の葬儀に軍人が現れ、「一般参列者に対し今回ジロウ附近の戦鬪状況を説明する所あり聴者をして感慨無量たらしめたり」という記事がある。<sup>(45)</sup>故人の戦いぶりを軍人が語り聞かせることの影響力は相当にあったものではないか。

このような兵士たちの戦いぶりは、新聞に掲載されて終わりではなかった。場合によっては、書籍として出版されたりすることもあった。<sup>(46)</sup>また、軍人が回顧録を執筆した際に、部下を悼む文章として書かれることもあった。<sup>(47)</sup>美談は読み捨てられる新聞だけではなく、長期間保存される書物として残されていたのである。これには、長期間にわたって読みつがれていくことも予期されていただろう。

加えて、新聞は次のような記事も載せていた。戦死者に多額の保険

金が支払われていたというものである。<sup>(48)</sup>これらの記事には、丁寧に戦死者の氏名と支払われた保険金の額までが書かれていることがあった。郵便局の生命保険をかけておけば家族が戦死しても大丈夫であるというメッセージであろうか。

とはいえ、家族が勇敢に死んでほしいなどと本気で考えている出征者の家族は少数であろう。出征した家族が戦死することは、複数の意味で悲惨であった。家族が出征しただけでも、次のような事件があったことが報じられている。山口町で、貧しい一家の働き手が出征し、家族のうち老人が病死、あとには子供達だけが残されてしまった。新聞は「其子供を貰ひ受けて養育しくるるか子供を雇入れて義務教育だけ済ましてくれる特志家はなきか」と読者に呼びかけ、山口町役場の兵事係へ申し込むように書いてある。<sup>(49)</sup>そして、新聞には遺族の悲哀を扱う記事も掲載されることがあった。現在の山口市金古曾出身の戦死者未亡人は、「軍人が戦死するのは最大の名譽ではありますが今少し生存して御国のために尽させたい者でありました」と控えめに死者を悼んだ。<sup>(50)</sup>家族が戦死したという知らせが誤報だった(ただし負傷していたという)というところで「遺族は命拾ひしたやうに喜んで居るそうな」という記事もあった。<sup>(51)</sup>

このように、新聞ではシベリア出兵の美談を積極的に掲載した。それは、郷土出身の兵士たちがいかに勇敢な軍人として戦ったかということを確認させるものであった。戦死した場合のみならず、負傷して生命は助かったものについても、最後まで戦って傷ついたものであることを強調するものであった。読者はこのような記事を読むことにより、シベリア出兵への賛否を越えて、個別の兵士達を支援することを目指されていたであろう。そしてこのような美談の集積こそ、軍事動員を精神的に支えるメカニズムのひとつであったのである。<sup>(52)</sup>



## 小括

以上のように、シベリア出兵で、兵士を出した地域であった山口町の新聞『防長新聞』は熱心に兵士の動向を書き、将兵の書簡を掲載した。彼らの書いたものがなぜ新聞に掲載できたかは明らかではない。ただ、意識的に「読まれる」内容が書き送られていて、軍関係者もそれを容認していたことは事実であろう。出兵自体を批判するような内容は存在しないからである。動員された将兵の書簡は、従軍記者の記事のようにリアルに戦場の様子を伝える役割を期待されていたと考えられる。また、この「現場で見ている」人によって書かれた記事から、革命と内戦で疲弊したロシア、そしてロシア人の姿をより具体的・共時的な体裁を持ったものとして読者に認識させようという考えがあったのではないかと推測させる。現地に向けては、将兵を慰問するためには各種の行動が起こされていた。慰問袋の送付、自治体では新聞や自治体発行の雑誌などが送られていた。学校単位からは手紙や作文、絵画などが贈られていた。第二節で書いたようなレスポンスは、まさにこのような行動が相互往復的になされたことの証左である。現地へとメッセージが送られ、反応が現地から戻ってくる。その時、現地から届けられた生のメッセージが、読者（新聞の読者も含めて）へ強い印象を与えることも計算に入っていたのではないか。新聞自体には読者からの投稿などが掲載されている様子はないが、このようなメッセージの相互の伝達に新聞紙面が果たしていた役割はかなりあるのではないかと考えられる。現実には他国に占領されたロシアの姿を目の当たりにしている軍人から送られてくる写真とメッセージは、「戦争に負けてはいけない」「強力な国家にならなければならない」などの信念を伝達し、人々の精神に食い込む上でかなりの重みを持ったものと考え

られる。

ただし、新聞がこれだけの長期的キャンペーンを張らなければならなかったのは、逆にシベリア出兵がさほど社会的に関心を持たれていないものであったことの裏返しであった可能性も示唆できる。新聞には「慰問袋の送り方」についての記事が載った。そこには、黒樺の封筒に入れられた慰問袋が届けられた実例が報告されていたのである。送るべきものが詳細に記された記事と並んで、このことは注目される。恐らく黒樺封筒の送付は、政治的反抗ではなく、「何も考えていない」ことが生んだ事件であった可能性がある。また、慰問袋に入れられる出版物への注文も、現地の軍人からのメッセージという形を取ってなされた。この記事は、「近來流行する妙な思想の雑誌」や「裸体美人または枕草子等」はやめてほしいと訴えている。しかも、強調されていたのはむしろ後者についてであった。「恰も寝たる子供を起して食ふに堪へざる腐敗した菓子を見せて泣かせる」ような行為だと非難されていたのである。「過激派」への攻撃的言辞を考えても、政治思想上の対策がおろそかにされていたとは考えられない。むしろ、国内は出兵に全く無関心であった可能性がある。『防長新聞』が社説で、出征者への支持・声援を呼びかけなければならなかったことと重ね合わせると以上のように推察できる。

そして、戦死・負傷者については、いかに優秀な軍人であるか（あったか）が、各種の形で示されなければならないかった。このようなものはプロパガンダに過ぎないかもしれないが、広範囲に配布される新聞に実名入りで掲載され讃えられるという行為の影響力は、軽視すべきではない。シベリア出兵はもはや撤収の段階に至り始め、動員に対する国民の反応がさめていたと考えられる時期には、このようなケアは絶対に必要であったといえる。特に軍隊を撤退させる時期に民心が刺激されることには神経質になっていたと考えられる。

このようにして伝えられたシベリア出兵の姿は、一九二〇年代においてはもはや単に美談としてだけ伝えられるとは限らなかつた。第五師団のものではないが、以下のような例がある。シベリア出兵後期に病身のまま徴兵され、現地で喀血して帰還させられた衛生兵がいた。

この元衛生兵・黒島伝治は、一九二八年に日本軍のポリシェヴィキ軍討伐作戦の光景を描いた小説を発表した。「ユフカ」という村を襲撃する日本軍を扱った「バルチザン・ウォルコフ」である。<sup>55</sup>だが、このような描写が社会的に広範な支持を得られなかつたのはなぜか（もちろん「バルチザン・ウォルコフ」は掲載誌が発禁になつたという理由もあつた）。活字と記憶との関連をも含めて考察していく必要がある。

## 注

- (1) 『防長新聞』は山口県立山口図書館に所蔵されているコピーを参照した。
- (2) 写真という、文字とまったく違うメディアについても研究は出てきている。本論文作成中に発表された、一ノ瀬俊也「負けた戦争の記憶—シベリア出兵の従軍記念写真帖をめぐる—」長田謙一編『二〇世紀における戦争と表象／芸術』平成一五—一六年科学研究費補助金（基盤研究B1）研究成果報告書、二〇〇五年所収は、シベリア出兵の最中から出兵後にかけて刊行された各種写真帖についての考察である。
- (3) 『国立歴史民俗博物館研究報告』の一〇一集、一〇二集（ともに二〇〇三年）はこのような問題を含んだ論文・史料紹介が掲載されている。また、各地の自治体史編纂で、このような手法が取られ始めているのではないかと考えられる。御教示を請いたいところである。
- (4) たとえば、拙著『初期シベリア出兵の研究』九州大学出版会、

二〇〇三年に出てくる『福岡日日新聞』の従軍記者黒田静男や、『シベリア秘史』（日本評論社、一九二三年）『蒲潮と沿海州』（日本電報通信社出版部、一九四三年）の著者山内封介はそうであるう。

(5) 三浦裕史『近代日本軍制概説』信山社、二〇〇三年。

(6) 『シベリア出征日記』風媒社、一九七八年、一九一八年—二月四日の項目。

(7) 「山口連隊兵戦死」『防長新聞』一九一九年九月十五日。

(8) 「軍事通信 出動第一回」『防長新聞』一九一九年九月一七日。

(9) 「我連隊兵」『防長新聞』一九一九年九月一日。

(10) 「軍事通信 支那馬車に乗り自動車を先頭に長蛇の如き隊形にて北進す」『防長新聞』一九一九年九月二三日。

(11) 「石川連隊長より留守隊への書信」前掲紙面。

(12) 「健気な母親」前掲紙面。

(13) 戦死者の数は『靖国神社忠魂史』第一巻、一九三五年。

(14) 「派遣軍状況」『防長新聞』一九一九年九月二九日。『西伯利に於ける第五師団』偕行社、一九三〇年によると、この戦闘は、ロシアの反革命軍セミョーノフ軍と共同で行われた。しかしこの書物には「セ」軍は全く無能にして我軍単独にて戦闘を遂行せると殆ど異ならざる結果」と書かれている（一三三頁）。戦闘中に逃げ出したロシア兵を、怒った日本軍の将校が殴打するという一幕すらあつたのである（八二—八三頁）。

(15) 参謀本部編『大正七年乃至十一年西伯利出兵史』第二巻、一九二四年の附表第一一を参照。

(16) 社説「我軍の奮戦」、および「師団長の戦況報告」『防長新聞』一九一九年一〇月一〇日。

(17) 「我派遣軍の奮戦に就き細野旅団長より」（続き）『防長新聞』一

九一九年一〇月二日（前日からの連載）。

(18) 「戦死者最後の書簡」「軍人家族慰問」「軍人会の慰問」「今道校記事」「防長新聞」一九一九年一〇月二二日。小学校から慰問文などが送られたのは、この学校の卒業生が戦死したからである。

(19) 「我軍の力戦」「防長新聞」一九一九年一〇月二九日。

(20) 「軍旗の向ふ処水火も辞せず」「防長新聞」一九一九年一〇月三〇日。

(21) 「莊嚴盛大なりし寺内伯埋骨式」「防長新聞」一九一九年一月一二日。

(22) 「皇后陛下より綬帶を下賜され」「防長新聞」一九一九年一月九日。

(23) 「防長新聞」一九一九年一月三〇日。作者は「深野中尉」とある。「ワシントン」は、作詞者不明であり、曲に関する著作権も消滅しているため、替え歌を転載しても問題はない。

(24) 「亡国の民の悲惨如斯乎」「防長新聞」一九一九年八月十五日。

(25) 「軍事通信 過激派のため見るも無残な人々」「防長新聞」一九一九年九月三日。

(26) 「軍事通信 西伯利式」「防長新聞」一九一九年九月一〇日。

(27) 「西比利漫話」「防長新聞」一九一九年九月一八日。この「西比利漫話」は複数の人々による執筆。

(28) 「西比利亜通信 軍人が大持て 拍車長靴の偽軍人が夕方より公園を闊歩する滑稽さ」「防長新聞」一九一九年一〇月一七日。この記事には、日本軍に「討伐に行き家に留守して居る過激派の美人と艶聞を流し泣き別れて帰る者」がいたということも書かれている。しかし、ここでの教訓は「露助（原文ママ）の七十パーセントは梅毒患者につき用心肝要」ということだけであった。

(29) 「チタ市近況」「防長新聞」一九一九年一月二三日。野砲兵第

五連隊の三人の将校が広島へ向かう途中で行った談話から。あまり大きな記事ではない。

(30) 「細野旅団長近信」「防長新聞」一九一九年一月一六日。

(31) 「穴戸少佐より国司少将へ」連載二回目。「防長新聞」一九二〇年一月二八日。

(32) 「軍事通信 蝸牛の旅行（つづき）」「防長新聞」一九一九年九月八日。

(33) 「軍事通信 西伯利式」「防長新聞」一九一九年九月一〇日。

(34) 「慰問状に対し」「防長新聞」一九二〇年二月八日。

(35) 拙稿「山口四二連隊のシベリア出動、一九一九年八月」「山口県立大学国際文化学部紀要」一一号、二〇〇五年。

(36) 「山口分会消息」「防長新聞」一九一九年一月四日。

(37) 一ノ瀬俊也「兵士たちの死と『郷土』」「国立歴史民俗博物館研究報告」九一集、二〇〇一年。

(38) 「名譽の戦死者」「防長新聞」一九一九年九月一八日。

(39) 「戦死者は孝行者」「防長新聞」一九一九年一〇月四日。

(40) 「戦死した馬丁の遺族」「防長新聞」一九一九年一〇月一日。

(41) 「勇士の功名記」「防長新聞」一九一九年一月一四日。これ以前にも、一月二日には「百二十発宛の弾丸を撃尽し群がる敵中に突入して壮烈なる最期を遂げし十三勇士」という書簡が転載されている。

(42) 「忠勇美談」「防長新聞」一九一九年一月二三日。

(43) 「忠勇者事跡調査」「防長新聞」一九一九年一月五日。

(44) 「武人の龜鑑（八）」「防長新聞」一九二〇年二月二七日。この兵士は一命をとりとめて帰国したと記されている。果たしてこの兵士の後半生はどのようなものであっただろうか。

(45) 「戦死者村葬」「防長新聞」一九一九年一〇月二四日。

(46) 第一二師団司令部編『大正七八年浦潮派遣軍第十二師団忠勇美譚』川流堂、一九二〇年、忠勇顕彰会編『忠勇列伝』(この本は長期にわたって編纂されていた。シベリア出兵の戦死者の分は一九一九年に第一巻が刊行された)は筆者も実物を見たことがある。ただし、『忠勇列伝』のシベリア出兵戦死者に関するものが全部で何巻あるのかは不明。

(47) 一九一九年のユフタの戦いで部下が大量に戦死した当時一二師団七二連隊長田所成恭の著書『弔合戦』博文館、一九二一年にはそのようなページがある。

(48) 例えば「九円で千円」『防長新聞』一九一九年一〇月二二日。記事のタイトル自体がかなり露骨である。

(49) 「兵に召されて窮乏せる一家 子を貰ふ人はなきや」『防長新聞』一九二〇年一月二八日。この子供がどうなったかについてはまだ不明である。記事では詳細に実名が記されている。

(50) 「も少し生きて御国の為に」『防長新聞』一九一九年一〇月九日。  
 (51) 「通知状人を殺す」『防長新聞』一九一九年一〇月九日。直前の戦死者遺族インタビューと同じ日に掲載されていることが複雑である。

(52) 高橋哲哉『靖国問題』筑摩書房、二〇〇五年が主張する、悲しみが名誉や誇りに転換されていく機能には、このような出版物の果たした役割もあったのではなからうか。

(53) 「山口支部で慰問袋募集」『防長新聞』一九一九年九月二二日。  
 (54) 「西比利亜夜話」『防長新聞』一九二〇年一月二三日。

(55) 「パルチザン・ウォルコフ」は『黒島伝治集』新日本出版社、一九八四年所収。「ユフカ」という村の名前は、日本軍がポリシエヴイキ軍に包囲殲滅された「ユフタの戦い」(一九一九年)との関連を思わせる。

(追記) 本論文は、平成一七年度山口県立大学研究創作活動助成事業による研究成果の一部である。

(日本の政治・比較政治論)